

# 明治キリスト教と朝鮮人李樹廷

金 文 吉

## (一) はじめに

一八七五年九月、日本の軍艦雲揚号が朝鮮江華島を占領した時、朝鮮政府はこれをたちまち砲撃をしたが、日本政府はこの事件を機会として朝鮮国に開国を迫った。ついに翌年一八七六年、江華条約が締結され鎖国体制を維持することは不可能となった。日本ははやめに西欧文化を取り入れ、富国強兵の動きの中、朝鮮侵略の準備も着々とすすめられていった。

朝鮮政府も日本侵略に目をさめ、自国の独立と開化を求める運動を行い、高宗一八七六年から一八八〇年度に数次、先進日本文化を学ぶため修信使を派遣した。修信使は「紳士遊覧団」という名をつけられた。

一回目の「紳士遊覧団」の視察範囲は、砲兵軍事施設と造船部分一五箇所、学校等一三部分、税関八部分、農業五部分、多くの人々が参加した。その中でもっとも関心を持ったのは農業部分であり、その中に安宗洙という人があった。安は一八七六年、一次視察団にふくまれ日本に来たが、当時日本には西欧農法を学び新農法を教えていた「学農社」の設立者津田仙という人がいた。津田仙は明治期におけるキリスト教者でもあった。当時「学農社」は新農法を

教えながらキリスト教を伝播する唯一の学校であった。新農法に関心を持つ安宗洙は、津田仙が執筆した「農業三事」という農書を学びながら、新しい宗教であったキリスト教にも興味を持っていた。

当時日本では西洋農法である「農業三事」が大変評判がよかったが、安もこの農書を持って帰国した。帰国後まもなく津田仙の「農業三事」を翻訳し「農業新編」という農書を出版した。朝鮮においても彼の新農書は封建社会の在来農業耕作法に比べて評判となり、朝鮮政府はこの新農書を歓迎して、朝鮮近代農業に大きな期待をかけた（安宗洙の新農法については別の機会に研究する）。明治における西洋農法は津田仙から安宗洙を通して朝鮮にも伝播された。

一方、安宗洙は新しい宗教であるキリスト教については友人である李樹廷という人に話をしたが、李樹廷はたちまち第二次「紳士遊覧団」として来日することが出来た。彼は入国まもなく津田仙の「学農社」を訪問し、新しい宗教であるキリストを学ぶことが出来たが、津田仙から学んだキリスト教が新しい宗教として朝鮮の国に初めて伝播した。

津田仙と出会ってキリスト教を学んだ李樹廷が信仰を受け入れる過程と、彼が始めて感じたキリスト教について若干述べたい。

## (二) 津田仙と朝鮮人李樹廷との出会い

朝鮮で大院君の鎖国政治が長く続いていた頃、日本では朝鮮におけるよりも数十年先行して、キリスト教が受容され、その教勢は伸張していた。

これは徳川幕府の「切支丹邪宗門八堅の禁制」の下で西欧宣教師たちが失望せず日本語を修得して日本人への英語の教授と聖書講義、あるいは西欧文明の書籍の翻訳等を通じて倦まず宣教の努力をした結果であつた。

元治元年（一八六四）十一月の第一日曜日、宣教師ブラウン（S. R. Brown）やバラ（J. H. Ballagh）に日本語を教へていた矢野元隆が日本国内に於ける最初のプロテスタント信者として受洗したが、その夜、外国人の開いた祈禱会の席上でヘボン（J. C. Hepburn）宣教師は

「切支丹禁制の日本で、この初穂を見たから、若し禁教の高札が撤去されるなら数年ならずして日本はキリスト教化されるであろう」と説き「我々は高札撤去のため努力せねばならぬと訴へた。」<sup>51</sup>

ちようどの頃、欧米諸国の政治状況を視察するため、日本政府によって派遣された岩倉大使一行は明治四年十月八日、横浜を出発して、米國ワシントンに着いたが、米國政府の態度はキリスト教の自由を強く求めるものであり、また同視察団の一部は明治五年七月十四日にロンドンに着いたが、イギリス政府も大使一行を歓迎するよりも日本のキリスト教迫害を非難し「日本のキリスト教徒を解教せよ」と呼ぶ状態であつた。

このような国際情勢を体験した大使一行は帰国後日本政府にその事情を上申した処、明治六年（一八七三）二月二十四日、太政官布告第六八号を以つて

「自今諸布告御発令毎に人民熟知の爲め、凡三十日間便宜の地に於て令揭示候事、但管下布達ノ儀ハ是迄ノ通可取計、従来高札面ノ儀ハ一般熟知ノ事ニ付、向後取除キ可申事」と布告された。

これはキリスト教禁教の高札の撤去を命じてはいるものの実は旧制度を一挙に廃止するものではなく基本的には旧

制度を維持しながら、徐々に自己を新事態に適應させようとする明治政府の方針の表現に外ならず、以後日本キリスト教は政府の黙許の下で、言わば日陰者として冷遇されながら布教活動を続けたのである。

この間、一八七四年（明治八年）一月三日、西洋（泰西）農学者として広く知られた津田仙は家族とともに築地にあったアメリカ・メソジスト教団宣教師ソーパー（J. Sophia）の自宅において、神の前に信仰を告白して同宣教師からバプテスマを受け、キリスト教信者となったのである。

日本キリスト教が種々の困難と迫害とを受けながら布教した結果、教会に加入し信仰を告白した人々は、大抵、上流社会士族出身であった。当時ある宣教師は

「神は日本の伝道事業において、知識階級が最初に、かつ最も強力に影響を受けることを適当と見たもうた、今日までにキリスト教者となった者の大部分は、この階層のものである。当地（神戸）においても横浜および江戸においても」<sup>1)</sup>と述べている。

しかし初期信者となった日本の上流社会士族たちの中にはキリスト教の信仰を持って徳川封建制の修正の余儀ないことを自覚し、彼ら自ら幕府の体制を変革しようとする者もあった。彼らにとって、新しい社会である近代市民社会の倫理と論理が展開されたのである。すなわち、新しい日本の建設と信仰とが不可分の関係を持っていたのである。これは明治初期の日本キリスト教信者の基本姿勢であった。

にもかかわらず明治キリスト教信者たちを詳しく見るならば、これは更に二つのタイプに分かれる。一つは「神を愛し基督に仕える如き篤き信仰を有せず、只だ之に依らざれば、以て我国の文明を維持すること」<sup>2)</sup>という傾向を持つ

人々であった。また第二のタイプは初期日本キリスト教宣教師の布教倫理に基づいた純粹なピューリタニズムである「偶像排斥」「一夫一婦主義」「禁酒禁煙」等の新しい倫理観を根底に持ちながら信仰生活をつづけていた人々であった。日本は西洋宣教師からキリスト教が受容された以後日々發展し、明治十一年には日本キリスト教信仰復興運動が起った。キリスト教信仰復興運動の正式名称は、第一回「全国基督教徒大親睦会」であるが、同親睦会は明治十一年七月十五日〜十七日の三日間、築地新栄教会堂において開催された。

大会の第一日目は午前七時三十分から開始され、先ず、十二地方代表二十七名の中から津田仙が議長に、書記として銀座教会牧師原胤昭、兵庫教会牧師村上俊吉が選ばれ、六百人収容の会場は三日間、六百人以上の大盛況であった。津田仙はいままで日本キリスト教が上流社会に布教して来たのに対して第一回全国基督教徒大親睦会によって下層農民まで布教することになったことを喜び「会堂の中には聴衆男となく、女となく、貴きとなく賤きとなく四隅にまで充満せり」と述べ、また、「主会はパリサイ人の家に宿すことあり況んや、パリサイ人なるざるのをや、至に親睦して同一の主なる神を讚美するは最も善しき事にあらずや、各会親和して成べき事は兄弟互に相助くるは主の聖意にかなわずや」と述べている。

このように全国基督教大親睦会によって日本キリスト教は所謂上流社会から下層社会まで布教することになり、大衆宗教として急速に教勢が成長した体験によって第二回「全国基督教大親睦会」が明治十三年七月十三日、大阪の梅花女学院で開かれたが、これもまた盛会であった。

つづいて第三回目の「全国基督教大親睦会」（明治十六年五月八日〜十二日）が開かれる一年前、序論に既述したように明治十五年十月に朝鮮政府は日本明治維新を視察するため「紳士遊覽團」を組織して日本に派遣した。この「紳

「士遊覽團」は朝鮮開化黨員を中心として構成されていたが、第一次「紳士遊覽團」はすでに明治十四年四月に日本を視察し帰国しており、この明治十五年のものは、第二次のものであった。

この第二次「紳士遊覽團」の構成メンバーに、李樹廷という人物がおり、彼が日本西洋（泰西）農学者であり、キリスト教信者である津田仙と出会うことになるのである。

次に李樹廷という人物について少し論じよう。彼は漢陽（いまのソウル）の人であり、称号は荃齊<sup>3</sup>という。彼は日本を訪れた当時、宮廷に年歴記者<sup>10</sup>として務めていた。

井上角五郎原作の朝鮮宮中物語「張嬪」に示されているところによれば、一八八一年七月二十六日、「壬午軍乱」が起って、朝鮮国で大騒動になった時、李樹廷は王妃の生命を保護するために、京城市内にある宮廷忠義者として知られている呉俊明の自宅に王妃を隠して、王妃を助けた。ところが「壬午軍乱」が激しく続くために、王妃は李樹廷を呼んで相談した。李は京城市近傍は危険であると考え、忠清道忠洲にある閔応植の別荘に避難するように王妃に勧めた。王妃を賤民の女の姿に扮させ、七月二十七日深夜に呉俊明の家を出発し間道をたどって寒い夜の道を王妃を背負って忠洲閔応植の別荘まで無事辿り着き、王妃の世話をした。<sup>11</sup>

これによって李樹廷は宮廷で強い影響力を持つようになった。この時期、李樹廷の親しい友人であった安宗洙は一八八一年四月に第一次「紳士遊覽團」の一員として日本に来て各機関を視察した後、農学者として有名であった津田仙宅を訪ねて農学を学んだ。その際、安宗洙は津田仙を通してキリスト教にも非常に関心を持ったけれども、朝鮮国ではまだキリスト教が受容されていなかったため、深くはキリスト教を学ぶことのできないまま帰国せざるを得なかった。彼がこのことを李樹廷に話したところ李はキリスト教に大変関心を持ち、キリスト教を学んで朝鮮国に布教

する決心で翌年一八八二年九月、第二次「紳士遊覽團」に参加して日本にやって来た。

彼がキリスト教に関心を持ったのは彼の叔父（父の弟）が大院君の天主教迫害の時に両手を縛られて殉教したことの影響によるとも考えられるが、上述したように彼が朝鮮宮廷において高名であったことは彼が自分の意志を実行に移すのに有利であつたらう。

ともかく、彼は青雲の志を持って日本に来ることができた。当時の外務大臣吉田清成が太政大臣三條実美に宛てた外交文書には、日本国内の文物を視察するために正使朴泳孝および副使、従事官、外に随員十一名が、また国情を視察するために金玉均および閔泳翊の諸人の他に随員李樹廷（外二名）が来日したと記載されている。このように李樹廷は金玉均らの国情視察グループのメンバーに入つて待望の日本横浜に上陸することができた。

李はすぐに東京に来て、先ず安宗洙から聞いていた農業とキリスト教の権威者津田仙を訪ね、初めて津田仙と対面することができた。李樹廷は津田仙に面会し、まず安宗洙が先の来訪の時の津田仙の好意に感謝していることを伝えると共に

「自分（李）が渡日の際にはぜひ津田家を訪れるよう告げられていたので今日、それが実現できたことは喜びにと述べた。  
たえない」。

と述べた。

李樹廷は在京中、度々津田仙を訪ねキリスト教について教えを受けた。彼は思想や宗教の拘束から解放された地、日本において思いのままに真理を探求し、キリスト教の研鑽を深めた。

同年十二月二十五日、李樹廷は津田仙に連れられて築地教会で開かれたクリスマス礼拝に参加し、初めてキリスト

教について深い信仰的感動を受け、しだいに信仰を抱くようになり、聖書学者、長田時行に聖書の大意を学び遂に東京露月教会牧師安川亭に「仏教と聖教（キリスト教）との異同」を質問し信仰試問を終り、一八八三年（明治十六）四月二十九日、洗礼を受けた。彼はキリスト教をまだ受け入れていなかった朝鮮の人として、始めて日本で洗礼を受けた人物であった。

一方、日本キリスト教界でも、李樹廷が信仰を告白し、洗礼を受けたことに対して、大変な喜びと神の摂理への感謝が強かった。というのも李樹廷が洗礼を受ける五年前、第一回「全国キリスト教徒大親睦会」の三ヶ月後、即ち一八七八年十月に「一致教会中会は海外伝道委員なる者六名を選挙し、先づ朝鮮に伝道者を送らんことを定めたり、かくて該委員等は朝鮮伝道に志ある者を探索して一人の同志者を得」とあるように、日本キリスト教一致教会は朝鮮に伝道することを決定し、有力な人物を選び朝鮮伝道することに力を傾けていたのである。李樹廷の受洗は朝鮮というキリスト教が受容されていない国の宣教という使命感を持って来日して機会を待っていた米國宣教師や、日本キリスト教の朝鮮伝道に大きな助力を与えたと思われる。

さて、李樹廷は日本滞留のわずかな期間に聖書を学び洗礼を受け、キリスト教の真理を自覚したのであったが、彼は津田仙の主幸する『農業雜誌』一〇三〇号に「蛇鱧サケン説」という論考を書いており、これは彼の信仰をよく表わしている。彼の人類の罪惡説を次に紹介してみよう。

「蛇鱧」といふものは「山鱧」と「水鱧」、二種類がある。名前が違ふけれど内実は同じである。鱧に似ているが、実は鱧ではない。陸に産するものは「山鱧」と呼ばれ、水に産するものは「水鱧」と呼ばれる。「水鱧」の方は形は蛇のようで鱗のある尾は平で横になっている。雌は小さくて雄は大きい。此の類の魚は酒を好み、航海してい



る船に酒の匂いがあると、すぐ船の底に集まって、その酒の漏滴を飲む。しかし、それは捕えにくいものである。陸に産するものは岩谷間、草むらに棲息し、形品も質も水鱧と同じのである。もし一匹を捕えて煮食すると体が健になり、白髪も黒くなり、健康者は更に健康になり、弱者はすぐ健康になることができるのである。殊に長年の肺病患者に対してはもつとも効果がある。その功は一つ一つ述べることができない。故に仙薬と呼ぶ。朝鮮の川、海の漁師達はそれが貴重なものであることを皆知っている。もしそれを手に入れば売る。私は日本水産博覧会で見学中、雌雄二匹を見た。雄の方はかなり大きくて、その鹿が臂のようである。雌の方は雄の半分である。このように体の大きいものは、もつとも捕えがたいものである。名札を見ると漢字がなく仮名で書いてある。方言でいえばエラブウナギとなる。本邦博識ある人々にはわかるだろうか？ 観客がそれにあまり注意を払わず、あるいはよく見る人にもわからない。然し、このような珍しいものは新聞に記載され、衆に知られざるを得ないである」<sup>16</sup>。

さて、キリスト教において悪魔が「蛇鱧」と呼ばれることから考えると、上述の「山鱧」と「水鱧」の二種類をあわせて「蛇鱧」は次のように解釈ができると思われる。つまり「山鱧」は蛇であり、神から悪魔を指しているが、「水鱧」は鱧ウツチであり、蛇に似た罪人を指している。ところが、鱧が別名エラブと呼ばれるように罪人は神によって墮落した状態から「選ばれて」キリスト者となることができるのである。この選びは神の摂理による選びであり、李樹廷もこの絶対者の選びによって、日本で洗礼を受け、神の民に加えられたのである。従って、李樹廷はこの「蛇鱧説」を書くことによって、神の摂理に対する彼の信仰と、キリスト者には選ばれた喜びを表わしていると思われる。

李樹廷の受洗と同年の五月八日〜十二日にかけて、上述したように、第三回日本基督教大親睦会が東京新栄会堂で

開催され、津田仙は李樹廷をつれて参加した。

同会について少し述べると日本全国の代表三十二名の代議員中から宮川終輝（大阪教会）が議長に、井深梶之助（東京）が副議長に選ばれ、その会場は立錐の余地のないほど満員であった。特に第四日目金曜日、午前九時からの聖餐礼拝における新島襄の「イエスが弟子達の足を洗い給う」という説教の後、聖餐礼拝の執事者奥野昌綱（新栄教会）牧師の発言により李樹廷が朝鮮語で祈禱した。この時大会場は四千人の満員の大盛況であり、強い感動につつまれていた。<sup>18</sup> この光景に感激した津田仙は急に立上り会衆を回りながら「奇跡」「奇跡」と連呼したと記録されている。

このように盛況の中に翌日五日目の最終日に、東京飛鳥山辺で郊遊会が行なわれた。李樹廷は会衆の前で自分の信仰の経路について長時間にわたって告白した。彼は、

「僕有啓者僕生於偏邦習熟寡陋不知文明之化近來貴邦仰頼聖靈之導誘得蒙僉君子之厚愛初領洗禮僅望大道至於聖書所訓不能窺萬分之一不敢自謂有所見解則今日盛會尤豈可妄宣謔說哉然必有所痒情不能忍欲質正於僉君子乞寬恕且撥愚蒙幸甚按新約書約翰傳第十四章耶蘇所示曰我在父而父在  
我爾在  
我而我在爾云其旨明顯而厥義奧妙乃說教之要旨致信之關鍵學者不可不深究故耶蘇最於此旨反覆申詳諸先生當無不了解僕於此亦最研究愈悟耶蘇極力提醒以此時々揭示天父在  
我々在  
父我在  
爾々在  
我即神人相感之理有信必成之確證耶蘇設譬曰我父爲  
圃人  
我乃眞葡萄樹爾爲  
此樹枝  
其理已直捷易解不煩穿鑿今僕更有何辭發明乎曰耶蘇當時使徒親承至訓更無餘惟至今日去聖世既遠恐學者不於義理上透徹則不能竊大信蓋神人相感之理如是譬燈炷不燃則無光燈炷是向道心燃爲信心火爲神感故神感非由信心則不可得徒有炷則不成爲燈故不燈時終不見光不信時終不得救若只領洗依人作念中

無<sub>二</sub>眞信<sub>一</sub>則非<sub>二</sub>惟不<sub>一</sub>能爲<sub>二</sub>聖徒<sub>一</sub>抑且<sub>二</sub>不得<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>人如<sub>一</sub>柱終不<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>燃則碎棄<sub>一</sub>之如<sub>二</sub>墮失<sub>一</sub>其味<sub>二</sub>則踐踏者同也神之在<sub>二</sub>天如<sub>一</sub>聲之在<sub>二</sub>鍾擊則響槌有<sub>一</sub>聲鍾與<sub>二</sub>槌雖<sub>一</sub>具而各懸<sub>二</sub>一處<sub>一</sub>其有<sub>二</sub>聲乎<sub>一</sub>故燈以<sub>二</sub>大炷<sub>一</sub>燃則光大鍾以<sub>二</sub>小槌<sub>一</sub>叩則聲小即多求多興小信小成<sub>レ</sub>之意惟無<sub>二</sub>不成之理<sub>一</sub>若信<sub>二</sub>三位<sub>一</sub>之旨則即信<sub>二</sub>己身與<sub>一</sub>三位並合爲<sub>二</sub>一夫以<sub>一</sub>此心至<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>神殿<sub>一</sub>言<sub>二</sub>其信心所<sub>一</sub>在神亦在焉神在<sub>二</sub>我身中<sub>一</sub>則我即在<sub>二</sub>神身中<sub>一</sub>一念即至間不<sub>レ</sub>容<sub>二</sub>髮不在<sub>一</sub>於上下而方在於爾動靜語默中<sub>レ</sub>故欲<sub>レ</sub>確<sub>レ</sub>知得<sub>レ</sub>救之成否<sub>レ</sub>只自省<sub>二</sub>信心之有無<sub>一</sub>莫<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>於師<sub>一</sub>莫<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>質於神<sub>一</sub>此是神人致<sub>レ</sub>感明驗也但不<sub>二</sub>深究<sub>一</sub>此義<sub>レ</sub>而確<sub>レ</sub>信上天之必有<sub>二</sub>我父<sub>一</sub>必有<sub>二</sub>基督<sub>一</sub>有<sub>二</sub>基督<sub>一</sub>必有<sub>二</sub>聖靈<sub>一</sub>則其得<sub>レ</sub>救罪<sub>レ</sub>而必至<sub>二</sub>天國<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>疑者以<sub>二</sub>聖靈之感化<sub>一</sub>而不<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>魔擾<sub>一</sub>不落<sub>二</sub>暗坑<sub>一</sub>者另是洪恩又不<sub>レ</sub>關<sub>二</sub>於通<sub>一</sub>埋與<sub>レ</sub>否若不<sub>レ</sub>然則爲<sub>二</sub>佛說<sub>一</sub>々々<sub>レ</sub>彼曰不<sub>レ</sub>悟則不能<sub>二</sub>成佛<sub>一</sub>蓋拳<sub>二</sub>梯於空中<sub>一</sub>而令<sub>二</sub>人超上<sub>一</sub>故與<sub>二</sub>聖教<sub>一</sub>雖易廻殊虛實即可<sub>レ</sub>判<sub>二</sub>

すなわち、僕に啓有るは、偏に邦に生きる。寡陋を習熟し、文明化を知らず、近来、貴邦に聖靈の導誘を仰ぎ頼み、僉君子の厚愛を蒙むるを得、初めて洗札を領かる。僅かに大道を望み、聖書に訓する所に至り、萬分の一を窺う能はず、敢えて自らの見解する所有るを謂はず。則ち、今日盛會尤も豈に警説を妄に宣す可けんや、然るに心に痒き所有らば情忍ぶ能はず、正に僉君子に質を欲し、寛恕を乞い且は愚蒙を撥すは幸甚し。

と篤い信仰を持って告白している。

大会が終わると役員四十名が東京九段坂写真館で記念写真を撮影したが、その際、津田仙の特別配慮で前列中央に、津田と李樹廷が座を占めている。

日本キリスト教界の新報「七一雑報」においては、李が朝鮮の国に福音が伝える前に既に洗札を受けたことを報告している。

「此者を始めとし朝鮮国内にてもプロテスタントにても此者が鼻祖なるべしとの事なり」<sup>21</sup>あるいは「往年欧米の兄弟が千里の波濤を打越へて我が日本に真神の福音を伝えられし如く、我兄弟をして彼の朝鮮に道を伝えよとの神意にはあらざるか、我愛する兄弟たちよ、李樹廷の事について聊か考へあらまほし」<sup>22</sup>との記事が見られる。

当時在日米国聖書協会の総務であつたHenry Loomis（明治十六年、李樹廷が洗礼を受けた年、朝鮮に於ける聖書協会の支配人となる）は李樹廷の敦篤な信仰告白を聞き、大変喜ぶと共に李樹廷に聖書翻訳を懇請した。これに対して、李樹廷は喜んで直ちに承諾し、洗礼を受けて二ヶ月後「懸吐漢韓新約聖書」(Sino-Korean New Testament adding the Korean apparatus for easy)の翻訳を完了し<sup>23</sup>、続いて漢文聖書から「マルコ福音書」を翻訳し、一八八五年、横浜で一千部が刊行された。もちろん聖書が日本において朝鮮語に訳されたのは始めてのことであり、即ち「聖書は宣教師よりも先きに朝鮮に入った」<sup>24</sup>のである。

李が聖書をハンゲル語に翻訳した業績について韓国キリスト教史について大活動をしている閔庚培は「韓国の基督教」(一九七五・一〇、ソウル)の中でハンゲル訳聖書の意義についてつぎのように指摘している。聖書に書いている深い思想、人権・自由・平和・愛などの思想の伝播を通じた民族の救援、それに加えて語文一致のハンゲルを貴重なものとして採用普及させることによつて語文生活に決定的な転換期をもたらした事実、そして言語と思想の連絡を前提にした高貴な新しい気風の発展と形成などにより、実に聖書のハンゲル翻訳は革命的な不滅の業績を残したと言わざるを得ない。

近代朝鮮文学界に著名な小説家である李光洙は「耶蘇教の朝鮮に与えた恩恵」(『青春』九号、一九一七・七)に次

のようにいった。「おそらく朝鮮の文学と朝鮮の言葉が真の意味において高貴な思想を盛る機会になったのは聖書翻訳がはじめてでしょう。彼に朝鮮文学が建設されたら、その文学史の第一ページには新旧約の翻訳が記録されているのは当然のことでしょう」。

また李樹廷はこの翻訳によって日本に広く知られるようになった。そこで日本政府は東京大学付属商業専修学校の外国語講座として朝鮮語を増設する際に李樹廷の高名を聞き、彼を招聘した。彼はこれに同意し、一八八四年（明治十七）七月に東京大学付属商業専修学校に赴任し、朝鮮語の教師になった。<sup>25</sup>

また、次のことから、李樹廷が日本キリスト教社会、学界のみではなく一般市民社会にも広く知られていたことがわかる。即ち、

「横浜姿見町の鈴木某は海岸教会の信者として元来菓子屋を渡世とし、評判も善く繁昌せしか蒸菓子を製するに、一種を仕上るに三日位懸る品もあれば、安息日を守る事、至つて難く、守れば種類に欠乏を生じ買客の不便となり、速も一得一失は免るべき事に非ざれば今度断然菓子を止め煎餅を製し是迄の辻占は猥芸なれば、其代に古今和洋の金言脩身訓語聖書の語などを刷たる紙片を入れ売出せり、廬上の看板は李樹廷氏の書にて（姿見煎餅）と筆太に書し傍に朝鮮の李樹廷と細字にて誌せしものなり何卒神の恵により信仰に進み商売も繁昌し且安息日を守り商業に従事する信徒の模範ともならん事こそ願しけれ」。<sup>26</sup>

という事があった。

このように李樹廷は日本社会に学者として、あるいは宗教育家として知られるようになり、一躍、その活動期をむかえたのであった。彼は東京大学付属商業専修学校朝鮮語の教師として、四年間活動しているが、この四年間に彼の考

えていたことはキリスト教を信じ生命をすくわれる信仰心だけでなく朝鮮國にキリスト教を取り入れ國を開化するということであつた。所謂、彼の精神的開化、すなわち、内面的開化思想がどのようなものであつたかについては、次章の「李樹廷のキリスト教観」において考察したい。

### (三) 李樹廷のキリスト教観

さて、前章において、すでに言及したように、津田仙のもとでキリスト教を学んだ李樹廷はその真理を深く悟り、朝鮮にキリスト教を布教して長い封建社會を崩し、國民を開化する道を模索した。これは前章で述べた津田仙の影響下で、農業を持つて外面的開化を目指した安宗洙とは相違する。キリスト教を持つて開化する、すなわち、内面的開化であつた。

彼は日本に来て約七か月後に洗礼を受け、その更に約二か月後に「六合雜誌」第三十五号に「天主教朝鮮に入る事實」という題目で、当時の朝鮮の事情を詳細に紹介している。

これは純漢文で書かれていたため、当時キリスト教界の有力新聞であつた「七一雜報」は

「朝鮮の李樹廷氏の誌れし者にて『六合雜誌』に掲げられたるが、漢文なれば茲に解よく其大意を抜摘さて婦女子の爲なす」。

として日本語に訳して記載している。その内容は

「大院君撰政するに及んで此教を嚴禁にし閭巷山野の嫌なく國中を探して信者と獵出し、男女老幼千人許も捕へ

て法廷に引出し虐刑にとつて」「一日も虚日なく十六年が間に死する者數十万人」<sup>28</sup>と国内事情を述べたものであった。

また彼は朴齊綱著『近世政鑑』<sup>29</sup>序文で朝鮮の国内・国外の事情を次のように述べている。

「朝鮮近代之史、可不得而讀」

すなわち、朝鮮近代史に関する書籍は読むことが出来ない事や、あるいはは

「自開以来、外交日好廣、而外国新聞、傳我邦事者、九虚一実」<sup>30</sup>

すなわち、我国も開国して以来、外交範囲は日に日に広くなってきているが、外国新聞の我国の事を伝えている記事は九虚一実であると述べている。

また、大院君の頑固な鎖国政策にもかかわらず、日本人津田仙の下で、キリスト教を学んだ李樹廷は、津田仙と初めて面会した折に、感謝の意図で津田仙に次のような詩を送っている。

「種徳門中見吉光 耕田自在福田長

欣々虚己迎人處 更悵明朝各一方」<sup>31</sup>

この詩を解説するならば、種徳門（朝鮮の国のこと）の中によい光が見える。耕した福田には作物がすくすくと成長している。喜んで虚己（自分）を迎えてくれた人のところ。更に明日の朝には各々別れることをいたむ。すなわち、李樹廷は津田仙と会ってから、キリスト教について聞き、その真理を自分自身はもちろんであるが朝鮮本国にも伝えて国民が福田（肥沃な地）ですくすくと生長する作物のように暮すようにさせたい心でいっぱいになった。そしてこのような恵まれた道から離れるのは哀しいことだと述べているのである。

佐藤喜峯は「七一雜報」に記載された李樹廷の詩を読んで大変感激した。彼は当時漢学者として著名であつて、漢文の「天路歷程」を最初に日本語で訳した人であるが、「六合雜誌」第三四号二二三頁（明治十六年五月三十日字）に七絶五首という詩の形式で李樹廷がキリスト教を伝えて朝鮮を開化するという内容を歌っている。その内容を紹介すれば、

「傳聽韓人觀道光 欣然拍掌感歎長

破除前日邪魔見 應悟安民濟世方」

すなわち、伝え聞いた話であるが、韓人李樹廷という人は道に大きな光を見て、非常な喜びと拍掌を持っているが、それは日本に来て新しい宗教（キリスト教）を発見し、彼は前日の夜に邪魔の夢から覚め、自分の国の人々が安らかに暮らすようにと悟ったということである。また、

「西国耶蘇如太陽 中華孔子似營光

韓人新聽初驚愕 馬太福音第五章」

すなわち、彼は他の宗教（儒教）に比べて、西洋の宗教であるキリスト教は太陽の如きであり、中国の孔子の儒教は營の中にある光のように衰弱していると述べている。韓人李樹廷はキリスト教を始めて聴いて、また、非常に驚愕したというが、その驚愕する根拠は聖書マタイによる福音書第五章の山上の垂訓にあつた。その聖句は、もともと津田仙が感銘深く愛読していたものであり、李樹廷も同様に津田仙の教えの中で最も深い印象を受けた聖句であつた。また、

「農学校中設聖堂 誨之不倦漢還洋



直持信盾兼神劍 刺破韓人頑固腸

信盾聖書中之語

すなわち、李樹廷は日本に来て津田仙が当時運営していた「学農社」農学校を訪ねたが、その時に受けた印象は単に近代的で新しい農業学校の教育の殿堂であるということではない。農学校中庭にあったキリスト教会堂において農業とキリスト教が一体として弛まず教育されていることを見て、これこそ理想の国であるとの感銘を強くしたということであった。あるいは、やはり彼の考えは、漢国である日本・中国・朝鮮は、新しい宗教であるキリスト教の真理を持つて西洋を学ぶべきであり、まずそのために、聖書の中にある御言を持つて儒教思想に捕らえられている頑固な国の在り方を変革するということであった。このことについて、

「雞林鎖国己千年 宇内人豪誰着靴

闖入心中破城府 先登第一姓津田」

すなわち、鷄林（朝鮮の国）の鎖国はすでに千年の歴史を持つている。この鎖国政策を支持していた豪族たちの心の中へと堅い鞭によつて新しい考えを注ぎ込まねばならないということである。李樹廷にこの考えを植えつけたのは、まず第一に津田仙であると述べられる。李樹廷はこのような考えを一日も早く実行したいと思ひ、

「韓郎一言失指天 歸朝欲乞聖書傳

偶然如有違盟約 再使猿客笑九泉」

すなわち、韓紳士（李樹廷）は、朝鮮に帰つて聖書を伝えることを盟約し、もしその志を失う時には「猿客に使され九泉に笑う」ということになると思つてゐるが、この諺の中にある猿客というのは戯客（『日本古語大辞典』松岡

静雄著、六四七頁）を意味し、従つてこの言葉は朝鮮に新しい宗教（キリスト教）を布教することを約束したにもかかわらず、その約束を守らないならば、馬鹿にされてもよいことである。このように李樹廷はキリスト教を朝鮮に布教する強固な意志を持っていたのであり、津田仙のもとで農業を学んで朝鮮の外面的開化をめざした安宗洙とは違い、キリスト教を朝鮮に布教することを目指し、そのために自分自身がまずキリスト教の真理に深く入らねばならないと考えたのである。

さて、前章に述べたように津田仙に連れられて、李樹廷は第三回全国基督教徒大親睦会に参加し、次のように信仰告白しているが、この告白を手掛りとして、彼の信仰の在り方を考察して見よう。

「按新約書約翰傳第十四章 耶蘇所<sub>レ</sub>示曰我在<sub>レ</sub>父而父在<sub>レ</sub>我、爾在<sub>レ</sub>我而我<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>爾」<sup>36</sup>  
すなわち、新約聖書ヨハネによる福音書第十四章で、イエス・キリストが教示し語られたところによれば、われわれは神にあり、神はわれわれの中にあって

「<sub>レ</sub>即神相感之理有<sub>レ</sub>信必成<sub>レ</sub>之確證」<sup>36</sup>

即ち、神人相感する理として信有らば必ず信仰の確証を得、確証を受けた人は必ずキリストが

「<sub>レ</sub>但不<sub>三</sub>深究<sub>二</sub>此義<sub>一</sub>而確<sub>下</sub>信上天之必有<sub>二</sub>我父<sub>一</sub>必有<sub>二</sub>基督<sub>一</sub>有<sub>二</sub>基督<sub>一</sub>必有<sub>中</sub>聖靈<sub>上</sub>」<sup>37</sup>  
聖靈を下され、

「則其得<sub>二</sub>赦罪<sub>一</sub>而必至<sub>二</sub>天国<sub>一</sub>」<sup>38</sup>

必ず信者は自分の罪の赦罪を得て天国に至ることができると述べている。

このように李樹廷の信仰の根本には、ヨハネ福音書的神秘主義が溺れていた。<sup>39</sup>このような神秘主義思想は当時日本

キリスト教界に存在していたものである。この根柢は、その当時の米國宣教師の宣教方法の中に探されねばならない。また、李樹廷はキリスト教における人と神の間の相感<sup>40</sup>は聖靈を通じて来ると論じ、その点において仏教とのちがいを指摘している。

「彼曰不<sup>レ</sup>悟則不能<sup>レ</sup>成佛蓋<sup>レ</sup>梯於空中而令人超上故與<sup>レ</sup>聖教難易迥殊虛實即可<sup>レ</sup>判<sup>40</sup>」  
即ち、仏教はその説法を通じて自分自身が悟らなければ成仏することは出来ない<sup>40</sup>と述べているが、李樹廷はキリスト教と接触して以来、仏教と儒教的倫理観から脱却し、前章に述べたように鷄林千年の頑固な封建思想を破り、津田仙の理想としていたような理想國家を建設することを考えた。

彼の仏教を拒絶する原理は朝鮮古典文学『金鰲新話』に探すことが出来る。この『金鰲新話』という書物について少し考えてみたい。著者金時習（一四三五—一四九三）はソウルに生まれ字は悦郷、号は梅月堂、東峯、清寒子、等がつけられている。幼時より漢文に親しみ、五歳の時に「中庸」「大学」に通じて世の人びとを驚かしたという。五歳の時に世宗王が接見し、「明袖五十匹」を下賜された。この時以来、人びとは当時大筆家と呼んだ。『金鰲新話』は最初の小説であり著者が一四六五年頃慶州の金鰲山に隠遁した時期に創作したが内容は仏教の来世観についてよく書いている。『金鰲新話』の原本は、「壬辰乱」の時に、日本に持ち込まれ、その後、一六五八年（承応二）『内閣文庫録』に記載され、日本文学界の「牡丹灯籠」、「銭湯新話」、「船頭新話」等に大きな影響をおよぼしていたが、明治十七年九月五日、栃木県士族出身大塚彦太郎は、この本を再刊する時、李樹廷に跋文を書いてもらっている。この跋文の中で、

「梅月堂與春澤皆掃落方外之士 故能縦筆於閨閣番艷 仙免奇幻之事 以寓其懷殆楚詞之比歟<sup>42</sup>」  
すなわち、梅月堂（金時習）と「九雲夢」著者金春澤の両者は共に、豪族の出身で宮中における面白い事柄を述べ

る中で、自分の思想を表現している。その作品内容はほとんどが中国の古代の作品楚詞の影響を受けたものである。そして『金鰲新話』の「南炎浮洲志」の中に次のように書かれている。

「一日因浮屠、問天堂地獄之説、復疑云、天地一陰陽耳、那有天地之外更有天地、必設辭也、問之浮屠、浮屠亦不能決答、而以罪福響應之説答之、生亦不能心服也」

すなわち、ある日倫生朴君という人がある僧と天国のことについて問答をした。僧曰く、「天国と地獄の説についてどう思うか」、これに対して朴生曰く、「天地には二つの陰と陽があるだけなのに、どうして天地の外にまた天地があるのか」と答えた。この答えについて、李樹廷は

「李樹廷曰、此心性之路、其迹也、非其源」

すなわち、彼らが持っている心性、即ち、儒教的な倫理道德は行迹であり、根本原理ではなく、李樹廷が信じているのは儒教の倫理ではなく、絶対者の存在についての教えであると。また朴生が夢の中で「南炎浮洲志」という所へ行つて焰摩王（南炎浮洲志王）と対話した中に次のようにある。

「鬼神無<sub>レ</sub>形無<sub>レ</sub>聲、然物之終始、無<sub>レ</sub>非陰陽合散之所為、且祭<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>、所<sub>二</sub>以謹陰陽之造化<sub>一</sub>也、祀<sub>二</sub>山川<sub>一</sub>、所<sub>二</sub>以報<sub>二</sub>氣化之升降<sub>一</sub>也、享<sub>二</sub>祖考<sub>一</sub>、所<sub>二</sub>以報<sub>二</sub>本<sub>一</sub>、祀<sub>二</sub>六神<sub>一</sub>、所<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>免<sub>二</sub>禍<sub>一</sub>、皆使<sub>二</sub>人致<sub>二</sub>其敬<sub>一</sub>也、非<sub>下</sub>有形質以<sub>レ</sub>妄加<sub>中</sub>禍福<sub>上</sub>於人間、特人君<sub>レ</sub>高懷愴、洋洋如在耳、孔子所謂敬<sub>二</sub>鬼神<sub>一</sub>而遠<sub>二</sub>之<sub>一</sub>」

人間が死んだ後、鬼神（靈魂）があるかないか、という問題についての対話において、「鬼神は形体も声もなく」「人間に禍福を与えることができないにもかかわらず、人々は鬼神があると思うだけである」。また、孔子が「鬼神を尊敬するけれども遠ざけよ」と論じているのに対して、

「李樹廷曰、三字、得々」

すなわち、李樹廷は鬼神についての以上の主張には大賛成であり、同書の、

「陰陽不測之謂神、即神也、神者妙用之謂也」

神というのは陰陽によつては測り難い存在であり、すなわち、神というものは妙用（不思議な働き）であるという考えに対しても、

「李樹廷曰、是々何不早說」

すなわち、「これは正しい、どうしてこの話をもっと早く説明しなかつたのだろうか」と大いに喜んで述べている。

既述したように李樹廷の思想は時代遅れになつた儒教的思想からぬげだし、新しい宗教（キリスト教）を信じなければ、国家の開化は不可能であるという視点から、当時朝鮮の奉じる儒教的思想を否定し、またこのような立場からまずその指導者である儒生たちを排除しなければならぬといふものであつた。李樹廷はこのような考えの下で、当時朝鮮が当面していた政治状況を論じているわけである。東京大学付属高等専修学校朝鮮語の教師として働く時に、明治十七年八月二十二日『朝鮮、日本、善隣互話』という同学校の教材を出版したが、同書の序文で次のように朝鮮社会の政治事情を述べている。

「論今日之局勢、則朝鮮、支那、日本、務相聯結、以支東洋之勢、雖或有過和不可失」

すなわち、今日の政治事情を論じるならば、朝鮮、中国、日本の三国が相互連結し、東洋の勢力を支えることが一番大切であり、

「亜細亞中支那最大、則小者宜相親合以均其勢、朝鮮比日本甚弱、則弱者尤宜謙恭以求全交、此

乃朝鮮待<sup>ニ</sup>亜細亞<sup>ハ</sup>同<sup>レ</sup>國<sup>ニ</sup>之道<sup>ナリ</sup>也<sup>ト</sup>

すなわち、当時、アジアの国の中では中国が最も大きな勢力であり、小国である朝鮮は親合を結び、勢力を均衡しなければならぬ、朝鮮は日本よりも弱い国であり、弱国は謙遜な態度で朝鮮国内の平安を求めることがアジア諸国に対応する方法であると主張し、その国際連合が当時朝鮮にとってきわめて必要であると説明している。そして、この中で一八八一年七月、「壬午軍乱」に関して次のように述べている。

「往年逆徒犯<sup>シ</sup>闕先<sup>ト</sup>攻<sup>メ</sup>行人之館<sup>ヲ</sup>曾未<sup>ニ</sup>幾日<sup>ナリ</sup>艦艦壓境<sup>ニ</sup> 梟獍喪<sup>フ</sup>膽強<sup>ク</sup>鄰沓<sup>シ</sup>至<sup>リ</sup> 助<sup>メ</sup>一定亂逆<sup>ニ</sup> 協<sup>シ</sup>贊時務<sup>ヲ</sup>以至<sup>ニ</sup>不變<sup>ニ</sup>、此固天誘<sup>フ</sup>逆徒之哀<sup>ヲ</sup>以啓<sup>ニ</sup>一新之機<sup>ヲ</sup>鄰之助亦大<sup>ナリ</sup>矣<sup>ト</sup>」

すなわち、往年に朝鮮では逆徒たちが反乱を起し、外国館舎などを攻めたことがあったが、まもなく、強い隣国が大量の軍艦で反乱を鎮圧した。

このようにして朝鮮は孤立的政治状態から抜けだしてアジアの諸国と連合し、

「保<sup>スル</sup>民之道莫<sup>ハ</sup>善<sup>ニ</sup>於交<sup>ニ</sup>鄰富<sup>ク</sup>國之策<sup>モ</sup> 亦莫<sup>ハ</sup>大<sup>ナリ</sup>於通商況今五洲區分萬國對峙<sup>ニ</sup> 交際之事、苟不<sup>レ</sup>以信則外憂日<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup> 招徠之方 或不<sup>レ</sup>盡情、則通商適足<sup>ニ</sup>以弊<sup>ス</sup>民也<sup>ト</sup>」

すなわち、民衆を保護する方法はなによりも、交隣富国の政策であり、それとともに、通商も重要である、只今世界は五州に区分され相互に対立しているが、外交面で信頼がなければ厄介な事態になる。

しかし通商できる国は、それによって国民を満足させることができ、このことは民衆にとって有利である。

また、李樹廷はキリスト教を布教することによって朝鮮を開くためには何よりも西洋諸国の文明を学び、その文明を取り入れなければならないと考えた。

「我邦欲<sup>カ</sup>法<sup>ハ</sup>歐米<sup>ナ</sup>、則莫<sup>ハ</sup>如<sup>ク</sup>近取<sup>ニ</sup>日本<sup>ニ</sup>、可以漸<sup>テ</sup>進<sup>ス</sup>於極致<sup>ニ</sup>是又朝鮮親<sup>ニ</sup>近日本<sup>ニ</sup>之利<sup>ナリ</sup>也<sup>也</sup>」

すなわち、西洋諸国の文明を学ぶのなら、むしろ近い日本に学ばねばならない、これは朝鮮にはもちろんであるが、日本にとつても最も有利な道であると述べた。上述のように李樹廷は日本文部省に招かれ朝鮮語「我邦言語」凡我之地理民情物産<sup>ヨリテ</sup>以及<sup>テ</sup>古今<sup>ノ</sup>歴史朝廷<sup>ノ</sup>禮制<sup>ニ</sup>毫無<sup>キ</sup>所隱<sup>ス</sup>」を教えながら、明治初期における日朝關係に大きな役割を果した。東京大学付属商業專修学校の教師となり、朝鮮語はもちろんであったが、あらゆる文化面に大きな業績を残し、明治初期の善隣友好期において重要な人物であった。

更に、精神的開化方法となった宗教的実践について述べるならば、彼はキリスト教の信仰を単に探求するだけではなかつた。キリスト教の信者になつた李樹廷は明治十六年四月二十九日、洗礼受けたばかりであつたにもかかわらず、当時、日本に滞留中の米國聖書協會総務ヘンリー・ルーミス (Henry Loomis) 宣教師の宅を訪ね、宣教師がいない朝鮮へ宣教師を派遣するように頼んでいる<sup>122</sup>。あるいは、同様に日本に滞留していた米國長老教會宣教師 George W. Knox と米國監督教會宣教師 Robert S. Macley と親交を結び朝鮮語を教えながら朝鮮國の宣教の必要性を強力に主張した。彼の意圖を聞いた R. S. Macley 宣教師は、本来は日本が宣教の目的地であつたにもかかわらず、朝鮮に行つて初代宣教師となり、朝鮮宣教に偉大な業績を残し、また教育にも貢献した<sup>123</sup>。

更に、既述したように、李樹廷は、一八八三年 (明治十六) に

「宣教師達が来るまでに、少くとも朝鮮語聖書の草稿を備へて置きたいと望んだ」

のであつたが、ヘンリー・ルーミスは「マルコ福音書」を朝鮮語で訳させ、初版三〇〇〇部を出版した。このことによつて「聖書は、宣教師よりも先きに朝鮮に入った」のである。このこともまた李樹廷のキリスト教を布教し朝鮮を開化

させるという内面的、すなわち精神的開化の実践的努力であったと言えるであろう。

以上のように李樹廷はその生涯において、わずか四年間、日本で生活したにすぎないにもかかわらず、彼の実践は鶏林鎮国一千年間の強固な攘夷思想を破りキリスト教の受容を通じて朝鮮を開化する道を開くものとなった。ところがそれにも拘らず、帰国と同時に保守党の手によって殺害されてしまった。なぜ、彼は殺されねばならなかったのだろうか？ 「植村正久と其の時代」第四卷二五八頁によると

「然しながら聖書翻譯の過程にとつて不幸な事には李樹廷は熱烈なる愛国者、政治家であつて、弟の來訪後間もなく、その目的に従つて朝鮮に自由党を再建しようとした日本人の隱謀に参加した」

すなわち李樹廷は日本に来て津田仙のもとでキリスト教を学び、そのキリスト教を朝鮮に布教して国を開化すること、つまり内面的開化を目指していたのであつたが、他方、彼は、熱烈なる愛国者、政治家として朝鮮に自由党を創設しようとしていた日本人の隱謀に参加したのであつた。

上記の史料には彼がどのような役割を持つて日本人の隱謀に参加したかは、明らかにされていない。ここで次にこの隱謀について少し言及したい。

これは一八八五年（明治十八）十一月、自由党左派であつた大井憲太郎を中心として小林樟雄、磯山清兵衛、景山英子らが朝鮮内政改革を企て、朝鮮に自由党を創設しようとしたが実行に移る前に資金問題と内部の変心した人々のため失敗し、大阪や長崎で全員が逮捕された事件である。<sup>66)</sup>

上述のようにキリストとの関連のもとで朝鮮の開化を目指した李樹廷がなぜこの隱謀事件に参加したのかという事情は二、三年ほど前からの日本の政治動向に遡らねばならないが、明治十五年十月、自由党が組織され、その仲間で



ある自由民権運動家の中心思想であった天賦人權説と当時のキリスト教が堅く手を結んでいたことから、自由民権論者とキリスト教信者の動きが同一視されていたという事を考えあわせて見れば、李樹廷が政治的関心を持っていたことも十分理解できることであろう。<sup>67</sup>

一方、朝鮮では「甲申政変」以後、李樹廷が日本で自由民権運動の中心的存在である自由党に加入したことを不穏な行動と判断し、彼の行動を探索するために金宣純という人が日本に送られた。金宣純は李の挙動をしばしば本国に報告していたが、このことについて李樹廷は不満を持ち、ついに金宣純との間に闘争を起こした。それによって李樹廷は頭部三ヶ所に傷を受けた。

当時「朝野新聞」の報道によれば、李樹廷が下宿していた東京神田区淡路町二丁目四番地の家主である渡辺留吉は次のように語っている。

「此金宣純と言ふは釜山の産で日本語に通じ、日本の事情にも明らかに知る人で朝鮮政府は毎月二十五円程の生活費を給して東京に奇留し、独立党の挙動などを時々本国へ報道していった」<sup>68</sup>

この事件について神田区小川町警察署の調べによつて、金宣純は朝鮮染山府国洞に本籍のある三十二歳の男だと判明した。東京軽罪裁判所は金宣純を刑法第三十条に照し重禁錮一年に処分した。<sup>69</sup>このように李樹廷が日本滞留中に自由民権運動家と深く関係し朝鮮にキリスト教を布教すると同時に日本自由党を創設しようとした事は事実であつたと私は推測する。このような関連があつて、前述のように隠謀事件、すなわち大阪事件が失敗に終ると李樹廷も帰国しなければならなくなつた。そして明治十九年五月二十六日、敦賀丸便で帰国し、<sup>70</sup>帰国まもなく保守党に捕えられて殺害された。彼が目指した内面的開化の業績は大きな影響力を持つものであり、また世界のどの国にも見られないほど

現在キリスト教の教勢が盛んになっている朝鮮キリスト教受容史において彼が果たした先駆的役割も無視できないであろう。

#### (四) 結 論

朝鮮は、より早くキリスト教を受容し発展させた明治期の日本から、キリスト教を受容したことになる。一九世紀朝鮮は中国使臣によってキリスト教という新しい宗教を伝えられたと史料にはあるけれども、実際、信仰を持って洗礼を受けたのは日本国においてである。すなわち、農学者の津田仙という人と出会ってからである。津田仙は明治期に日本だけではなく、朝鮮国に近代化される時期の画期的人物である。一面では農業改良文化人として知られた人物であり、またキリスト教受容史に大きな影響があった。その業績は物質的と精神的の両面であったといえよう。李樹廷の日本での生活は、朝鮮とキリスト教のかけ橋になり、彼がのこした業績は多いけれども、残念ながら本国から当時日本留学生送還命令が下り、一帰国しなければならなかった。

日本の側からも考えても李樹廷の存在は大きな意味がある。当時日本政府は大陸侵略という動きの中で、彼を通して朝鮮国の事情や文化を受けることができたのではないだろうか。いろいろな立場にとつて李樹廷は重要な人物であった。

注

- (1) 佐波亘著『植村正久と其の時代』第一卷、昭和十三年四月二十八日刊、二五七頁。
- (2) 比屋根安定著『明治以降の基督教傳道』、昭和二十二年三月十日刊、三十七頁。
- (3) 関根要人編輯『恩師ソーバー博士』、一九三八年五月二十八日刊、十九頁。
- (4) "History" by O. Cary, p.107.
- (5) 『福音新報』明治三十四年、三〇一頁。
- (6) 『護教』明治四十一年五月二十八日、第八七八号、七頁。
- (7) 『七一雜報』明治十一年八月二日、三卷三十一号。
- (8) 右同。
- (9) 李光麟著『韓国開化史研究』、一九七〇年一月刊、二三四頁。
- (10) 年歴記者を務めていたというから、おそらく「観象監」の歴官ではないかと思う。歴官というのは中人層の人であり、英祖十七年以来「観象監」に歴官一名を赴京使に参加させ、西洋神父が主催した中国「欽天監」を見学する慣例があった。
- (11) 『明治文化全集』第十三卷、昭和三年刊、三五二頁。
- (12) 佐波亘著『植村正久と其の時代』第二卷、昭和十三年四月刊、二五七頁。
- (13) 外務省編纂『大日本外交文書』四十一卷、昭和二十六年三月刊、二九五頁。
- (14) 都田豊三郎著『明治の基督教者津田仙』、昭和四十七年十一月刊、一四八頁。
- (15) 佐波亘著『植村正久と其の時代』第二卷、昭和十三年四月刊、二五七頁。
- (16) 李樹廷の「蛇鱧説」  
蛇鱧有「山鱧水鱧」二種、名異而實同、似鱧而非、産於陸者、謂之山鱧産於水者、謂之水鱧、形蛇而有鱗、尾扁而横、雌小雄大、此魚嗜酒、行海之船中有酒、氣、則水鱧集於船底、酒或有漏滴之漏、必承而食之、然極難得也、産於陸者、在「岩谷草券之間」、而形質與「品質」、亦如之、若獲一尾、而貧食、則壯陽補陰、髮白還黑、能便「羸者」肥疾者健、積年肺疾尤效、其功不可殫述、故謂之仙藥、朝鮮江海漁業者、皆知其為「貴重之品」得則售「重價」、可「以面」貧余遊「日本水産博覽會」、見雌雄二枚、雄頗大、其鹿如臂、雌較雄小其半、如此大者、尤難得、審「視札名」、則無「漢字」、題「品」只以「假字」、題「方言」曰「エラブウナギ」、日本以「鰻」為「ウナギ」、則上云「エラブ」、久未「知」何名稱、然其實非鰻屬也、此邦博物之士、其知也否、來觀者甚不「經意」、或有「諦視者」、亦多不解然如此玲異之種不「得」不「頌諸」新報、以「公衆知」。
- (17) 『七一雜報』八卷、明治十六年五月十一日、十九号。

- (18) 佐波巨著「植村正久と其の時代」第二卷、昭和十三年四月刊、五六七頁。
- (19) 『六合雜誌』第三十四号、明治十六年五月三十一日。
- (20) 佐波巨著「植村正久と其の時代」第二卷、五六九頁。右同書、五七九頁。
- (21) 「七一雜報」明治十六年五月二十五日、第二十一号。
- (22) 李光麟前掲書、二二〇頁。
- (23) 佐波巨著「植村正久と其の時代」第二卷、昭和十三年四月刊、二五五頁。
- (25) 「朝野新聞」明治十七年七月六日。
- (26) 「福音新聞」明治十六年七月三十一日。
- (27) 『六合雜誌』第三十五号、明治十六年六月三十日。
- (28) 「七一雜報」第一卷七号、明治十六年八月十四日。
- (29) 『朝鮮政鑑』については韓国近代史学者李光麟が『韓国開化史研究』「朝鮮政鑑をめぐる若干の問題」において既に研究を行なっている。
- (30) 朴斉綱著「朝鮮政鑑」李樹廷の序文参照。
- (31) 『六合雜誌』第二十四号、明治十六年五月三十日、二二三頁。
- (32) 「七一雜報」明治十五年十一月二十五日。
- (33) 『六合雜誌』第六五号、明治十八年十二月三十日、一六五頁。
- (34) 再使猿客笑九泉、——これは中国の古文から出たことわざであるが、朝鮮ではこの世の中で実践出来なかつた場合は後世（死後）に実践する志が固いという意味。
- (35) 「七一雜報」明治十六年五月二十五日。
- (36) 右同。
- (37) 右同。
- (38) 右同。
- (39) 閔庚培「韓国教会最初の信者とその信仰類型問題」、延世大学校神科大学『神学論壇』第十三輯、一九七七年二月刊、四十八頁。
- (40) 「七一雜報」明治十六年五月二十五日。
- (41) 李家源訳「金鑿新話解題」、一九五九年十月刊、二九頁。
- (42) 金時習著「金鑿新話」、明治十七年九月五日、大塚彦太郎再刊、李樹廷の跋文参照。
- (43) 「南炎浮洲志」というのは仏教が信仰されている俗世を痛斥した書生朴君という人が夢で閻羅国に行つて燄魔王と問答をした後禪位を受けたという話し。
- (44) 金時習著「金鑿新話」下巻、大塚彦太郎再刊、明治十七年九月、二頁。
- (45) 右同、六頁。
- (46) 李樹廷著「日朝善隣互話」、明治十七年八月刊、第一巻序文二頁。
- (47) 李樹廷、前掲書右同。
- (48) 右同書、一頁。

(34) 再使猿客笑九泉、——これは中国の古文から出たことわざ

- (49) 右同書。
- (50) 右同書、二頁。
- (51) 右同書、四頁。
- (52) "Henry Loomis Friend of the East" by C. D. Loomis, New York 1923, p.80.
- (53) 朴致聖「韓民族運動において基督教学校の役割」、檀國  
 大学校刊『論文集』第十四輯、十四頁。
- (54) 佐波亘著『植村正久と其の時代』第四卷、昭和十三年四  
 月刊、二五八頁。
- (55) 関庚培、前掲書、四九頁。
- (56) 松尾章一「大阪事件研究の今日的意義」、大阪事件研究会  
 刊行『大阪事件の研究』、一九八二年五月、四頁。
- (57) 山下徳治著『日本資本主義發達史』講座第四回、昭和七  
 年十一月刊、十七頁。
- (58) 「朝野新聞」明治十九年三月二十四日。
- (59) 「朝野新聞」明治十九年三月二十五日。
- (60) 右同、六月二十日。